

誕生！日本初の洋式ガラス工場

近代ガラス工業の発祥と品川

明治維新後、政府は積極的に殖産興業政策を押し進めました。文明開化に伴い、多くの分野で莫大な輸入超過をかかえていた政府は、西洋の技術を取り入れて国内生産することにより、輸入を押さえようと考えたのです。

太政大臣三条実美は、家令丹羽正庸・村井三四之助の建築で、東海寺境内の日黒川河畔（現北品川4-11）に模範工場として日本初の板ガラス製造工場「興業社」を設立しました。明治6年（1873）のことでした。それまで日本では切子ガラスやジャッパン吹きとよばれるガラス製の吹竿等を使った小振りで華奢な和製吹きガラスが主流でした。けれども、維新後、洋館建設に伴う板ガラスや海上保安のための舷灯（航海灯）の需要が増し、従来の方法に代わる高度な技術の開発が必要となったのです。「興業社」はイギリス人技師トーマス・ウォルトンを雇い入れ、生産率を高めるためイギリスから機械や技術を導入しました。東京・大阪から優れたギヤマン職人が大勢集められました。原料に珪砂、燃料に石炭を利用したのも新たな試みです。「興業社」では、直径30～50cm、長さ1.2～1.8mほどの大きな円筒を吹竿で吹き、切れ目を入れてのばすという方法で板ガラス製造が試されました。けれども、この方法は容易でなく、経費がかさむばかりで失敗に終わりました。

▼品川硝子製造所（現在「博物館明治村」内）



▶ガラス花瓶

第2国内国勸業博覧会（1881）では、これと同種のもので出品されている。

東京国立博物館蔵



官営「品川硝子製造所」

明治9年（1876）、工部省は「興業社」を買収し、工場は官営の「品川硝子製造所」となりました（翌年、名称は「品川工作分局」に変更）。今後のガラス産業の重要性を認め、産業の育成と技術者の養成を目的とした赤字を覚悟の出資でした。用地を買収し、施設や設備の拡充が積極的に行われました。

ここでは、ウィーンのガラス工場で修行した佐賀藩の藤山種広が舷灯用紅色ガラスの製造にあたり成功しました。またその後、明治12年（1879）、イギリス人技師ゼームス・スピートラの指導で洋食器の製造が開始されました。明治14年（1881）、政府主催の第2回内国勸業博覧会で入賞し、翌年にはエマヌエル・ホープトマンによりカット技術が移入されて高い評価を得たガラス器でしたが、国内ではまだまだ需要が少なく、経営は赤字続きでした。庶民の日常生活の中に洋食器が浸透するには、もう少し時間がかかったのです。

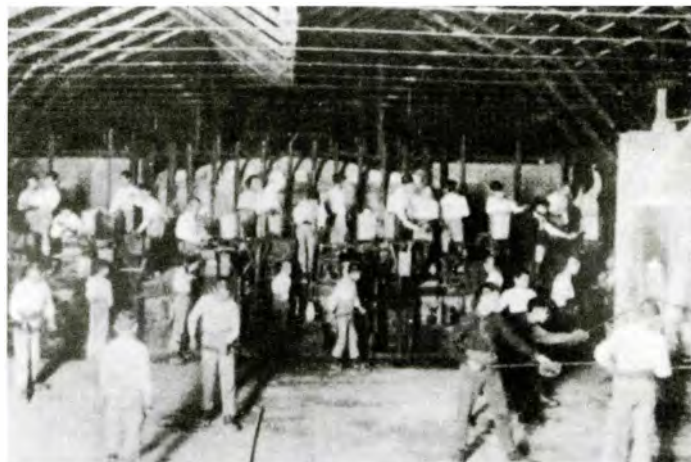
西村勝三と品川ガラス

大量の在庫をかかえ、さらに板ガラス製造に失敗して経営不振に陥った政府は、明治17年(1884)工場を旧淀藩主稲葉正邦と連盟で佐野藩々士であった西村勝三に貸下げました。翌年、西村は磯部栄一と共に工部省から払下げを受けて、工場は民営となりました。耐火レンガの国産化をはじめ(のちに「品川白煉瓦(株)会社」を同敷地内に設立)、ガス、靴、メリヤス等の製造を手がけて成果を上げている西村は、「品川硝子製造所」の名称はそのまま引き継いだものの、経営面では全体を四科(即ち①陸軍用水壺 ②薬用壺 ③ランプ用油壺 ④飲食器、理化学用品)に分け、製造の専門化を図りました。また、当時東京職工学校(現東京工業大学の前身)教師であったワグネルの指導を受け、技師中島宣をドイツに派遣し、ジーメンス式複熱窯を導入して、さらに生産量を上げることに成功しました。

明治21年(1888)、品川硝子製造所は業務拡張に伴い、資本金15万円で新たに「品川硝子会社」として発足しました。ここでは横浜の麒麟麦酒の新発売に伴い、日本で初めてビール壺の大量生産を手がけ、薬壺やプレスガラス皿等とともに同社の主力商品となりました。けれども、おりからの経済恐慌の波と板ガラス製造の失敗がたたわり、明治25年(1892)の11月に解散にいたりました。



▲ビール瓶の出荷



▲工場内での作務風景

伝・大重仲左衛門作
金赤色被桜文ガラス花瓶
品川歴史館蔵(品川区指定文化財)



西村勝三(1836—1907)
「品川硝子製造所」跡を見下ろす、東海寺大山基地に眠る。

明治6年にはじまり、何度かその形を変えながら同じ場所に引き継がれてきたガラス工場(通称一品川硝子)は、約20年で幕を閉じることになりましたが、新技術の導入や優れた技術者の育成等、後世に果たした役割は図り知れないものがありました。後に日本で初めてステンドグラスを作った岩城滝次郎(のちに「岩城硝子」設立)をはじめ大重仲左衛門など、ここで育った職人達は多くが独立して活躍しています。遂に品川では完成をみなかった板ガラスも、やはり品川硝子製造所の伝習生だった島田孫市(のちに「島田硝子」設立)によって明治35年(1902)、商品化に成功しています。

なお、当時のレンガ造りの建物の一部は昭和43年(1968)に愛知県犬山市の博物館明治村に移築され、貴重な明治期の建造物として、窯場跡から発掘されたビール壺等遺品と共に保存展示されています。